

〈言葉〉

伝え合う喜びを味わうことができる子の育成 —紙芝居作りによる言語活動の援助の工夫—

沖縄市立高原幼稚園 教諭 高田 美乃

I テーマ設定の理由

インターネットの普及に伴い、世界中の人々と会話をし情報を得るなど、コミュニケーションの方法が広がりつつある。その一方で、相手の顔が見えず文字だけのメッセージは、受け取る側にとって良くも悪くもなり、正確に気持ちを伝え合うことができない場合がある。相手と気持ちを伝え合うにはお互いに顔を合わせて表情を読み取ったり反応を見たりすることが大切である。また、自分の思いを言葉で伝えることや、相手の考えを聞こうとする「伝え合い」が重要である。

幼稚園教育要領では、言葉の獲得に関する領域「言葉」のねらいの一つに「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」と示されている。内容の取扱い(2)では、「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味を持って注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。」と示されている。ただ自分の思いを伝えたり相手の話を聞くのではなく、話したくなるような感動体験があり、相手に思いを伝える喜びを味わうことで、相手の思いも理解し、伝え合う喜びを味わうことが重要である。

本学級の実態として、絵本が大好きで読み聞かせを集中して聞いている。友達同士誘いあったり、自分の思いやアイデアを伝えたりしながら遊ぶことができる。反面、自分の思いばかりを主張してトラブルになることもある。また、興味関心のあることには耳を傾けるが、関心のないことには姿勢が崩れ、隣の子とおしゃべりをし、相手の話を聞こうとする気持ちが弱い。

これまで、手遊びやカード、絵本を取り入れ、落ち着いてクラスでのひとときを過ごすことができるように工夫を重ねてきた。また、人前で自分の思いを伝える場の設定として、一人一人発表できるような当番制の発表方法を取り入れてきた。話を聞く指導として、「聞き上手」の掲示物や、話す人の気持ちを知らせるなど、自分の思いを伝え合う保育を展開してきた。しかし、話す姿勢や聞く姿勢にとらわれてしまい、伝え合う楽しさや、話し手の気持ちを考えながら聞くための援助が十分でなかった。このことから、共通で経験したことをお互いに伝え合い、自分の思いを聞いてもらえた喜びや、相手の話を聞いて共感できる体験を通して、伝え合う喜びを味わわせることの必要性が感じられる。

伝え合う喜びを味わうためには、まず園行事を通して感動体験が味わえるような活動を展開する。感動体験を味わうことで、幼児はその体験を誰かに伝えたいようになる。そこで、紙芝居作りの場を設定する。その際自分なりの言葉で伝える楽しさや、相手の思いに気づき共感する楽しさが存分に味わえる援助を工夫することで、話す楽しさや聞く楽しさにつながり、伝え合う喜びを味わうことができるようになる。

そこで本研究では、園行事をもとに、感動体験が味わえるような活動を取り上げることで、話したくなる気持ちを受け止め、幼児の気づきや思いに耳を傾け、思いを伝える喜びが味わえるような援助に努める。一人一人の考えをつなぎ、物語を作ることで、話を聞いてもらえる喜びが味わえるようにしていきたい。また物語作りから発展しての紙芝居作りを通して、グループで相談し物事を決めていくことで、相手に思いを伝えたり聞いたりする中で、伝え合う喜びが味わえるだろうと考え、本テーマを設定した。

II 目指す幼児像

- 1 経験したことを自分なりの言葉で伝えることができる子
- 2 相手と思いを伝え合いながら活動を進めることができる子

III 研究目標

伝え合う喜びを味わうことができるように、感動体験をもとに、経験したことを自分なりの言葉で伝えたり相手の話を聞いたりする喜びが味わえるような援助を工夫することで、紙芝居作りを通して実践

的に検証する。

IV 研究仮説

1 基本仮説

紙芝居作りにおいて、自分なりの言葉で伝える楽しさや、相手の思いに気づき共感する楽しさが存分に味わえる援助を工夫することで、話す楽しさや聞く楽しさにつながり、伝え合う喜びを味わうことができるであろう。

2 具体仮説

(1) 物語作りの場において、感動体験を通して、言葉遊びや絵本を活用して幼児に活動への期待を高め、話したい意欲につなげ、幼児の話に耳を傾けたり、発問して思いを引き出したりすることで、自分の思いを伝える喜びを味わうことができるだろう。

(2) 製作する場において、相手の思いに気づき共感する楽しさが存分に味わえる援助を工夫することで、話す楽しさや聞く楽しさを味わうことができ、伝え合う喜びを味わうことができるだろう。

3 検証計画

(1) 保護者アンケートの実施

① 第一回事前アンケートで、自分の思いを伝えることや話の内容の興味関心への実態調査をし、結果をもとに理論研究で研究内容を深める。

② 第二回事後アンケートで幼児の変容を分析し、仮説の検証及び研究の成果課題をまとめる。

(2) 検証保育の実施

① 紙芝居作りを通して、製作過程で起こる選択（色や配置など）をグループで相談しながら決めていく活動を取り入れ、言葉を通して他者とかかわることができるようにする。

② 相手の思いを受け入れず自分の思いばかりを伝えている幼児に対しては、その子の思いを受け止めつつ、周りに目を向けるよう言葉かけをする。

③ 自分の気持ちを伝えずに相手の思いを受け入れてばかりいる幼児に対しては、教師が自ら発問を投げかけたり、思いを引き出し、周りの子に伝えパイプ役となることで、思いを伝えたり、相手の話を聞いたりしながら伝え合う喜びが味わえるようにする。

V 研究構想図

次ページ参照

VI 理論研究

1 幼稚園教育要領「言葉」の捉えについて

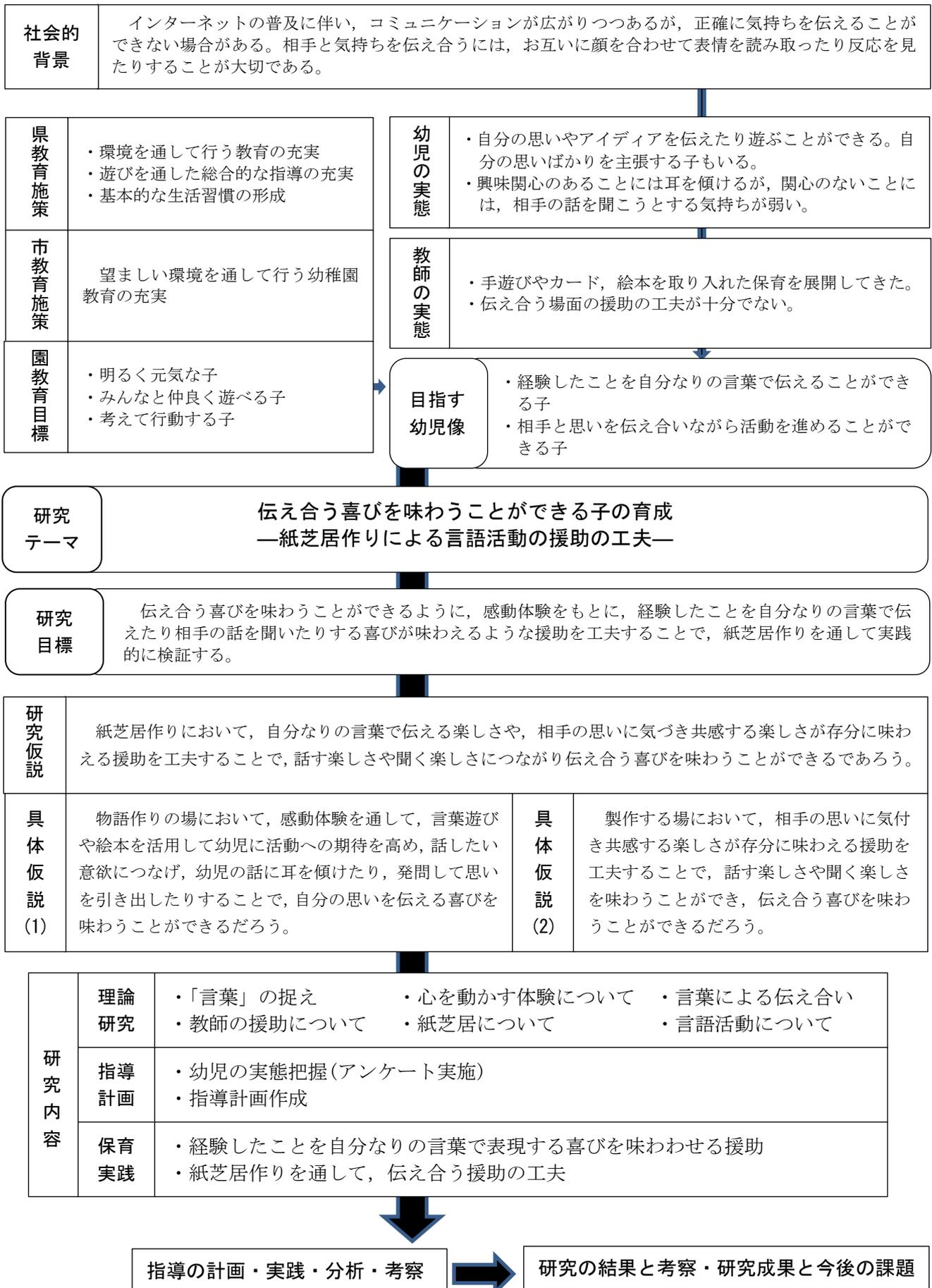
幼稚園教育要領解説の「言葉」では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」と示されている。言葉で表現したり相手の話を聞こうとする「伝え合い」の意欲や態度の育成が大切である。また、「教師は、幼児が言葉で伝えたいような経験を重ね、その経験したことや考えたことを自分なりに話すこと、また友達や教師の話を聞くことなどを通じ、言葉を使って表現する意欲や相手の言葉を聞こうとする態度を育てることが大切である。」とも示されている。幼児は自分なりの言葉で表現する楽しさを味わうことや、相手の話を聞く楽しさを味わうことを通して、相手の話を聞こうとする態度の育成が大切であると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究では、幼児が言葉で伝えたいような体験を取り入れることで、話したい意欲につなげていく保育を展開する。また、絵本の読み聞かせや言葉遊びを活用し、話を聞く楽しさが味わえるような援助を行う。

2 心を動かす体験について

幼児は、経験したことや心を動かすような体験をしたときに、教師や友達に話したくなる。心を動かす体験は「感動的な体験」「感情的な体験」「遊びの中」などがある。この三つについて、幼稚園教育要領解説（2008）を参考にまとめる（図1）。

V 研究構想図



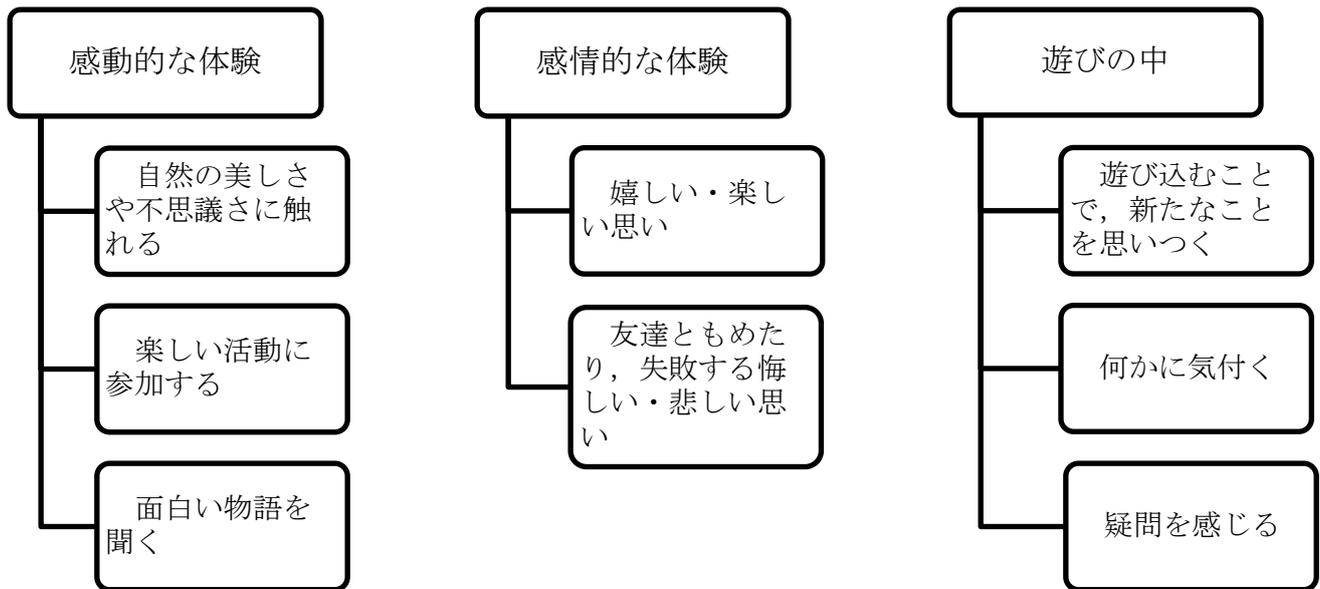


図1 心を動かす体験

自然や遊び、友達との関わりなど様々な場面で、幼児は心を動かされる体験をしている。以上の活動から、楽しい活動になるように言葉遊びを取り入れたり、園外保育を実施して自然や動物を五感を通して発見したり、不思議さに触れたりできるように言語活動の援助の工夫を図る必要がある。

3 言葉による伝え合い

中央教育審議会答申（2008）を参考に、心動かされる体験から、言葉による伝え合いができる過程をまとめる（図2）。

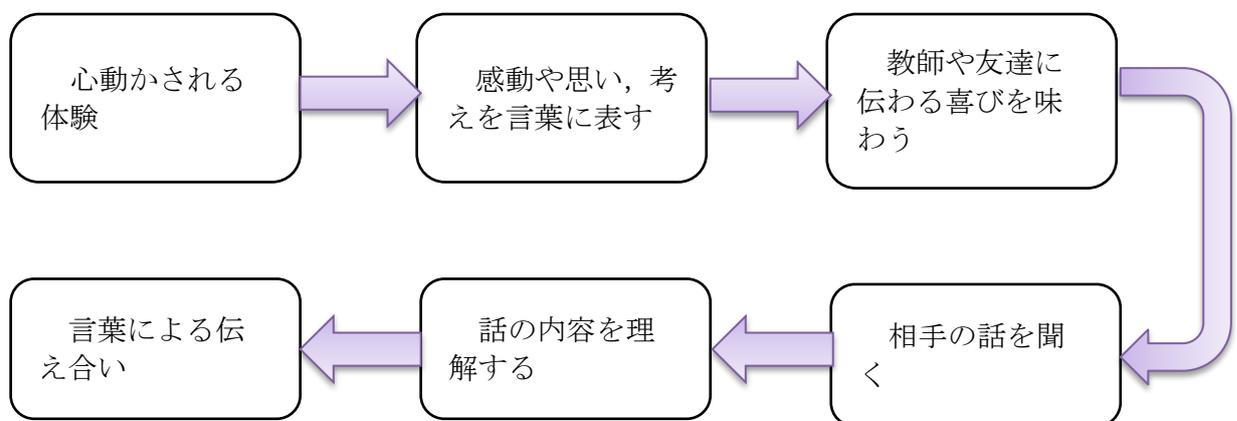


図2 伝え合い(中央教育審議会答申 2008 参照)

伝え合う喜びを味わうためには、心動かされる体験をすることが必要である。心動かされる体験をすることで、「話したい」「伝えたい」気持ちになる。そこで教師が、「話したい」気持ちを受け止め、話を聞いてあげること、「伝わる喜びを味わう」ことにつながると考える。そのためには、教師の聞く態度も援助の一つとして大切である。

伝わる喜びを味わうことで、聞いてもらえた嬉しさから、相手の話も聞こうとする態度につながり、相手の「話の内容が分かる」ことで聞く楽しさや喜びを感じると捉える。お互いに考えを出し合ったり聞いたりする「言葉による伝え合い」を充実させ、相手と意思を伝え合いながら活動を進めることができるような援助が必要であると考えられる。

4 教師の援助について

(1) 教師の援助

幼児が伝え合う喜びを味わうためには、話したい欲求を受け止めることが必要である。幼稚園教育要領解説（2008）を参考に、教師の援助についてまとめる（表1）。

幼児は「話したい」「聞いてほしい」という思いで教師に話しかけにくる。その際、作業しながら

幼児と顔を合わせずに聞いたり、そっけなく「あとでね」などと対応してはいけない。そうすることで、せっかく幼児の話したい意欲を押しつぶしてしまうことになりかねない。「心を傾けて」とは、教師は幼児の心に寄り添い、じっくり聞くことで、教師自身がよい聞き手となることと捉える。また、よい聞き手だけでなく、思いを引き出したり思いを代弁したりして幼児同士の伝え合いができるように援助することも必要だと考える。

(2) 伝え合いの指導方法

保育の様々な場面で、幼児同士が相談する場を設定して、物事を決めることがある。その際、発言権が強い子がリードをとり、特定の子の考えだけで進めていくことが見受けられる。神長美津子 他 (2009) は、伝え合いを「自分の考えを言う」「友達のを聞く」「みんなで一つの考えにする」と述べている。

特定の子だけで進めるのではなく、グループ全員が自分の考えを伝えることができるように援助の工夫を行っていくことが考えられる。

右記 (図3) は、「自分の意見を言う」「友達のを聞く」を絵や文字で示したものである。「みんなで一つの考えにする」という言葉を幼児に身近な言葉で表すために、「相談」で表記した。

相談という言葉は、花いちもんめで歌われているので、幼児には親しみのある言葉である。紙芝居作りでは、物事を決める際、グループで相談してみんなで一つの考えにすることを知らせていく。

5 紙芝居について

藤田復生 (1980) は、紙芝居作りについて、「幼児の作ったお話をもとにして作り、できるだけ短く、変化のある楽しいものがよい。」「場面は、3・4場面から、多くても7・8場面にし、遠くからも見やすいように大きく作る。」と述べている。

起承転結を考え、本研究では、教師がある程度物語の構成を考える。幼児が自分の経験や考えをもとに登場人物のセリフを決めていく。セリフは一人と言うところや全員で声を揃えて言うところなど、変化をつける。物語の初め・中・終わりに全員のセリフを導入することで、一体感を持たせる。紙芝居のサイズも、生活発表会などで披露することを考え、遠くの観客を意識して大型紙芝居として製作する。

紙芝居について森上史朗 (1982) は、「場面ごとに絵を描き、それをストーリーを読み上げながら引き抜いていくという形式のもの」と述べている。その他にもいくつか形式があり、以下にまとめる。

表1 教師の援助

- ① 心を傾けて幼児の話や背後にある思いを聞きとる。
- ② 友達同士で自由に話せる環境を構成する。
- ③ 状況に応じて教師が仲立ちする。(言葉を付け加えたり、思いを訪ねたりする。)
- ④ 皆で一緒に一つのまとまった話を集中して聞く機会をもつ。
- ⑤ 落ち着いた場の設定をする。
- ⑥ 教師も幼児と共に聞くことを楽しむ姿勢であること。

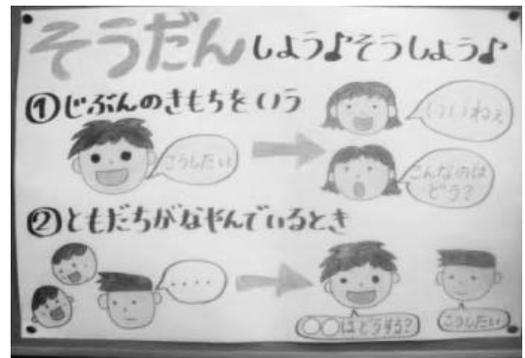


図3 相談しよう

表2 紙芝居の形式

めくり式紙芝居	絵の上部をとじ、めくりながらストーリーを展開する。
巻物式紙芝居	模造紙などをつなぎ合わせた長い紙に絵を描き、巻物のように巻き取りながらストーリーを展開する。
差し込み式紙芝居	絵の一部に切り込みを入れたり、窓をあけたりし、そこに別に描いた絵を差し込んだりして、絵の一部が変化するようにしたもの。
貼り絵式紙芝居	背景だけを描いておき、別に描いて切り抜いておいた人や、動物などを貼り付けながら話をしていく。

紙芝居にも様々な形式がある(表2)。本研究では、紙芝居には背景だけを描き、登場人物はそれぞれ幼児が手に持って演じることができるように進める。登場人物を自由に動かすことで、物語の世界に広がりが増え、見る人も楽しめる。

6 言語活動について

(1) 言語活動とは

沖縄市教育振興基本計画(平成24~28年度)によると、幼児教育の充実として「基本的生活習慣の育成と言語・表現活動の充実」が掲げられている。その中で、「生活のリズムやあいさつ等の基本的な生活習慣を身につけさせるとともに、自分の思いや考えを表現し、言葉で伝え合う喜びを感じることで育つ園児を育成する。」と示されている。

言語とは、国語中辞典(1976)によると「音声、または文字によって思想・感情・意思を表現・伝達・理解する行為」の意味として記されている。音声には「話す・聞く」が、文字には「書く・読む」がある。四つを含めて言語活動となる。園生活の中で、言語活動の対象となる活動を具体的に以下に示す(表3)。

表3 園生活における言語活動

項目	内容	言語活動
話す	<ul style="list-style-type: none"> 心を動かす体験を通して、先生や友達に自分なりの言葉で表現する。 相手に分かるように言葉で伝える。 感じたこと、見たこと、想像したことを言葉で表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自然にかかわったり、季節を取り入れたりする中で、感動や発見を言葉で表す。 砂場での協同遊び、当番活動などを通して思いや考えを伝え合う。 学級で夏休みに経験したことを話す。 自分のしたいこと相手にしてほしいことを言葉で伝える。 知りたいことを尋ねる。 グループで簡単な相談をする時に自分の意見を言う。 友達の良いところを言葉で伝え合う。 人形劇、劇遊びをする。 イメージに合った言葉を考えて、替え歌を作って歌う。 異年齢交流で、相手に応じて、相手に分かるように話す。
聞く	<ul style="list-style-type: none"> 親しみをもって、相手の話す言葉を聞こうとする。 絵本や物語を一緒に聞いている友達と共感したり、楽しんだりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉遊びをする。 絵本の読み聞かせに参加する。 教師や友達の話を聞く。 友達とのいざこざから、相手を理解したいと思い、話を必要感を持って聞く。
書く 読む	<ul style="list-style-type: none"> 生活に必要な言葉の意味や使い方が分かり、使う。 文字を使う喜びを味わう。 絵本や物語などに親しみ、想像する楽しさを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 看板のメニューなど、生活に関した遊びの中で文字や言葉を使う。 園庭で見付けた虫のことを図鑑や絵本を見て調べる。 母の日や父の日、勤労感謝の日などで、感謝の気持ちを手紙で表す。 絵本をみて想像を膨らませて楽しむ。

幼稚園では、主に「話す・聞く」活動が主である。「書く」活動は、文字を使って伝える楽しさを味わうことを踏まえて指導する。言葉遊び、紙芝居製作の活動では、幼児が相談していく中で物事を決めていけるような言語活動に取り組む。

(2) 言語の発達段階について

幼稚園教育要領解説(2008)の「保育所保育指針の発達過程」に表記されている言葉の発達に関する事項を以下にまとめる(表4)。

三歳は「話したい」「欲求を伝えたい」気持ちがあり、四歳では、遊びの中で相手と衝突する経験を繰り返すことで、折り合いをつけようすることが分かる。遊びの中で自分の気持ちを伝えて、

表4 言語発達

三歳	話し言葉の基礎ができて、盛んに質問するなど知的興味や関心が高まる。
四歳	感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。
五歳	言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。自分たちで決まりを作ったり、自分なりに考えて判断したり、けんかを自分たちで解決しようとする。
六歳	仲間の意思を大切にしようとする。思考力や認識力が高まり、文字などへの興味や関心も深まっていく。

相手とイメージが通じ合う喜びから、次第に相手の話も「聞こう」という気持ちにつながっていくと考える。五、六歳では、言葉により共通のイメージを持って遊び、「思考力が高まり文字などへの興味関心も深まる」とあり、言葉遊びを楽しむことができる。

意欲があり旺盛で、思考力が高まる六歳で、言葉遊びや物語を考えるなどの活動を効果的に仕組み、言語力を育てたい。

(3) 言葉遊びについて

言葉遊びは、想像を巡らせ、自分の言葉で表現して進めていくゲームである。代表的なのがしりとりである。他にも、回文や同音異義語、早口言葉などがある。ただ保育に取り入れるのではなく、言葉遊びで何を育てたいのかを理解し、活動につなげることが大切である。

言葉遊びについて小宮山繁（2008）は、言葉遊びによる身に付く力を以下のように述べている。

表5 言葉遊びで身に付く力

① 言語能力を高める	② 言語活動を活発にする
③ ことばに対するセンスをみがく	④ 伝え合い、わかり合う力がつく
⑤ 物語づくりの力がつく	

言葉遊びを取り入れることは、伝え合い、物語作りに有効な手立てであることがわかる（表5）。そこで、本研究では以下の三つを言葉遊びとして取り入れる。

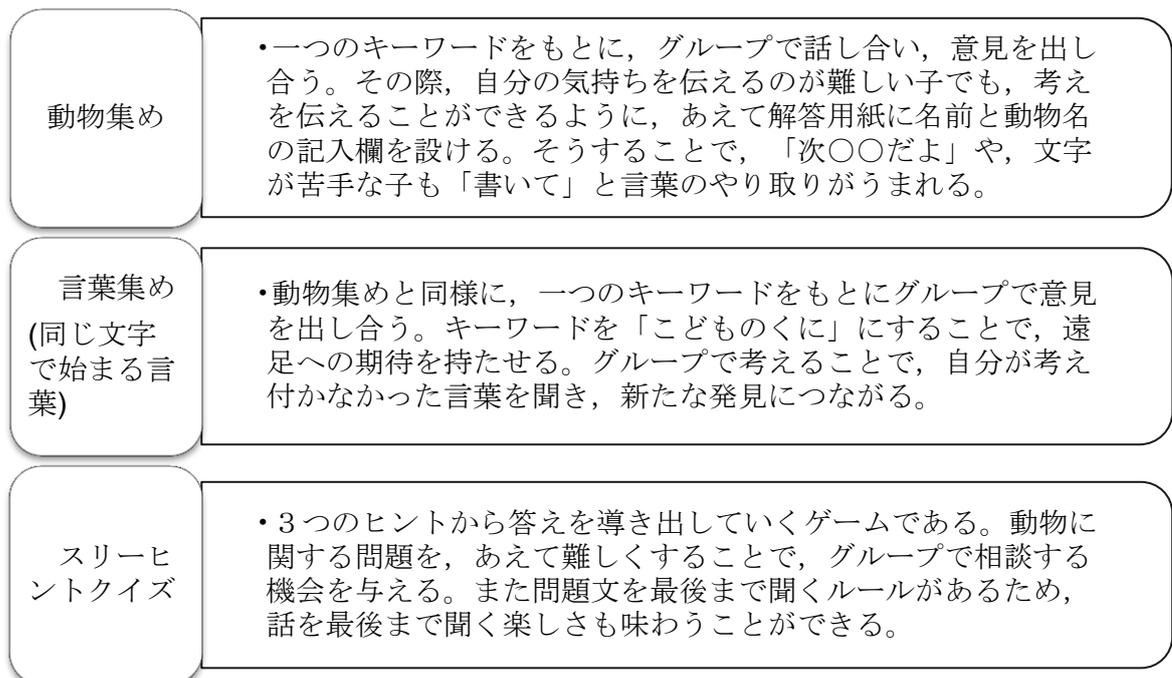


図4 本研究の言葉遊び

以上(図4)の活動を通して、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞こうとする態度など、伝え合いが身に付くと捉える。このように、言葉遊びを含む言語活動を通して伝え合う喜びを味わうことができる考える。

Ⅶ 研究実践

1 活動名

「みんなで楽しく発表しよう。」

2 活動の目標(「話す・聞く」の視点から)

- (1) 自分が気づいたことや考えを言葉で表現することができる。「話す」
- (2) 相手の話を最後まで聞くことができる。「聞く」

3 活動について

(1) 教材観

紙芝居は一般的に、一枚一枚に絵が描かれており、それを場面ごとに引き抜いていく形である。クラスでのひとときや保護者による読み聞かせなどで活用され、幼児にとって身近で親しみやすい教材である。今回の紙芝居は、一学期に牛乳パックの人形を使ってごっこ遊びをしていた姿をもとに、絵に取っ手をつける形を取り入れ、動きのある紙芝居を展開する。

紙芝居作りでは、「背景や動物を相談して決める。」「声をそろえて発表する。」など様々な場面で言語活動が必要である。場面を捉え、伝え合う喜びを味わうことができるようにしていきたい。

(2) 幼児観

学級の幼児は、読み聞かせが大好きで集中して聞くことができる。また、牛乳パックで作った人形を使って、自分のイメージしたことを言葉で伝えたり、グループで物語作りを楽しんだりする経験している。遊びの中で、イメージを伝え合って楽しく遊ぶ姿も見られる一方で、自分の思いを通そうとしてトラブルになることや、相手と意見が分かると自分の思いを伝えようとせずに黙ってしまう幼児もいる。

自分の思いを伝え、喜びを味わうだけでなく、相手の思いも受け入れながら伝え合う喜びを味わうには、言葉遊びを通して自分の思いを伝えたり、相手の思いも聞いたりする活動を展開し、その経験をもとに、思いや考えを伝え合いながら紙芝居作りの活動を進めていく。そこで、自分の思いが伝わる喜びや、相手の話を聞く喜びを味わわせたい。

(3) 指導観

① 言語活動の充実で、話す喜びを味わわせる。

言葉遊びでは、ある言葉から連想される言葉を考え、自由な発想を楽しむことができる。その際、話す喜びを味わうことができるように、一人一人意見を出させる工夫として、グループの解答用紙に一人一人の枠を作ったり、個別に考えを聞いたりして進めていく。また、聞く楽しさを味わうことができるように、「スリーヒントクイズ」で問題を聞いて何の動物か当てるゲームを行う。ルールの中で、「最後まで問題文を聞く。」のほかに「分からないときはグループの子と相談してよい。」という内容を加える。

② 相談することの大切さや、伝え合う喜びを味わわせる。

花いちもんめのセリフで使用される「相談しよう」というキーワードで、幼児に分かりやすく知らせる。表示では、「話す」ことに重点をおいて書かれている。クラスでは、「一人で決めずにみんなで決める。」ことも伝える。教師がすぐに答えを出さずに、できるだけ幼児同士で解決できるように見守り、問いかけて思いを引き出したりし、必要に応じてヒントを出すなど援助する。

4 本研究との関わり

本研究で考える「伝え合う喜びを味わう」とは、感動体験について意欲的に自分の思いを話し、話す喜びや聞いてもらえる喜びを味わうことと捉える。相手とのかかわりの中で、相手と共感して喜び必要性を感じて聞こうとすることで、聞く喜びを味わうとともに、伝え合う喜びを味わうということである。伝え合う喜びを味わわせるために、紙芝居作りにおいては、言語活動を効果的に仕組み、グループを中心とした学級の友達と存分にかかわらせ、伝え合う喜びを味わわせる。

5 活動の評価規準

	◎幼児の発達する姿	☆教師の援助
A	◎自分の思いを相手に伝えたり、最後まで相手の話を聞いたりして、活動を進めている。(伝え合い)	☆活動の様子を見守り、褒めたり認めたりして、必要に応じて援助する。
B	◎自分の思いを伝えたり、相手の思いも受け入れようとしながら活動を進めている。 ◎相手と意見が合わなくても、折り合いをつけようとしている。	☆相手を受け入れようとする姿を認めつつ、相手が思いを受け入れてくれていることにも気付けるよう言葉をかけて援助する。
C	◎自分の思いを伝えることはできるが、相手の思いを受け入れることが難しい。(聞く) ◎困った時や、相手と意見が合わなかった時に、自分の思いを伝えることが難しい。(話す)	☆思いを受け止め、認めるとともに、相手の気持ちを伝える。 ☆思いを引き出し、相手に伝えたり、伝え方を知らせたりする。また、言葉で伝えることの大切さに気付かせる。

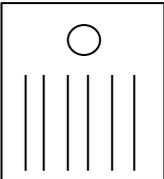
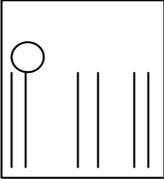
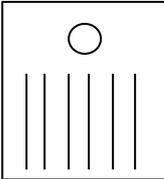
6 活動の指導計画

「言葉遊び」, 「紙芝居作り」, 「ドキドキ発表会」という段階で計画を立てる。

	回	◎活動	○ねらい・内容	☆教師の援助
言葉遊びで話す喜びや聞く楽しさを味わう(4)	1	◎絵本を見る。 「どうぶつえんにいきましよう」 ◎言葉遊び ・言葉集め(動物)	○秋の遠足(子どもの国)に期待を持つ。 ・絵本の読み聞かせに参加する。 ○考えたことを伝えて遊びを楽しむ。 ・自分が考えた動物名を伝えることができる。	☆秋の遠足までのカウントダウン表を掲示し、期待を持たせる。 ☆読み聞かせの際、文字のない場面では幼児のつぶやきを拾って共感する。 ☆グループ活動で、それぞれ一人ずつ枠の中に答えを書いていくことで、どの子も自分の意見を主張できる雰囲気作りをする。
	2	◎ペープサートを見る。 「相談ってなあに」 ◎言葉遊び ・言葉集め(子どもの国)	○教師の話聞き、友達と考えを出し合いながら遊びを楽しむ。 ・自分の考えを伝え、相手の考えも受け入れようとする。	☆相談する場のあり方を、ペープサートでわかりやすく伝えることで、自分から話そうとする気持ちや、相手の意見を聞くことにつなげる。 ☆遊びの様子を見守り、思いをうまく伝えることが難しい時は、教師が思いを受け止めたり伝え方を知らせたりして仲介する。
	3	◎絵本を見る。 「ネコとライオンにってる? にてない?」 ◎言葉遊び ・スリーヒント ◎遠足に向けて(見る視点)	○話を最後まで聞く楽しさを味わう。 ・話を最後まで聞き、グループで相談しながらゲームを楽しむ。	☆最後まで問題文を聞くことをルールの一つに入れ、話を聞く楽しさが味わえるようにする。 ☆友達と相談して決めることを伝え、相談している様子を誉めて、意識づける。 ☆五感を通して、動物を観察する視点に着目させる。(触覚, 視覚, 嗅覚, 聴覚)
	4	◎秋の遠足に参加する。 ・動物を見る, にお	○身近な動物を見たり触れたりして、感じたことを言葉で伝える	☆自分なりに気づいたことを表現している様子を見守ったり、幼児の言葉に耳を傾けたりして、伝える

		いを嗅ぐ，鳴き声を聞く，触る。	楽しさを味わう。 ・動物を見たり触ったりして，感じたことを伝える。	楽しさを味わうことができるようにする。
紙芝居作りで伝え合う喜びを味わう(7)	5	◎物語作り ・セリフをみんなで一緒に考える。	○経験したことを自分なりの言葉で伝えたり，相手の話を聞いたりして，物語作りの楽しさを味わう。 ・相手とイメージを共有しながら物語作りを進める。	☆秋の遠足に行ったことを話題にし，物語作りへとつなげていき，自分のイメージを相手に伝えたり，相手の話を聞きながらグループごとに物語作りを進めていく。 ☆イメージがしやすいように，ペーパーサートを準備しておく。
	6	◎場面に合わせて紙芝居に色を塗る。 ・どの色がいいか自分の考えを伝える。 ・絵具で塗る。	○思いを伝え合いながら紙芝居作りを楽しむ。 ・場面をイメージし，考えを相手に伝える。	☆自分達が描く場面は，どんな色のイメージがあるか発問して，言葉を引き出していく。
	7	◎動物を決める。 ・自分のやりたい役を相手に伝える。 ◎セリフを考える。	○自分の思いを伝え合いながら紙芝居作りを進める。 ・自分の思いを伝え，相手の話も聞こうとする。	☆やりたい役が重なった場合は，やりたい気持ちを受け止めつつ，教師がパイプ役となり，相手の気持ちを伝え，どうすればいいか考えさせる。
	8	◎画用紙に動物の役の絵をかく。 ◎セリフをグループで一緒に考える。	○相手に分かりやすい言葉で表現する。 ・相手とイメージを共有しながら物語作りを進める。	☆共通のイメージを持ってセリフを考えることができるように，他グループのアイデアを知らせたり，発問したり言葉を付け足したりする。
	9 10 公開 検証 保育 11	◎セリフを声に出す。 ・声の大きさ，速さに意識してセリフを言う。 ◎各グループで発表し合う。	○相手に伝わりやすい発表の仕方を知る。 ・ゆっくり大きな声でセリフを言う。	☆相手に分かりやすく伝えるためには，どのように話すとよいのかを話し合い，よりよい発表の仕方ができるようにする。 ☆振り返りの場で，良い点と改善点を伝え，聞いている側が必要感を持って聞くことができるようにする。
ドキドキ発表会(6)	12 13 14 15 16 17	◎観客を意識した発表の仕方を実践する。 ◎繰り返し練習する。 ◎友達の発表を聞いて，出番を意識する。	○自信をもって表現する。 ・ゆっくり大きな声でセリフを言う。 ・友達の発表を，必要感を持って聞く。	☆話し上手やセリフを教室内に掲示し，意識しながら練習できるようにする。 ☆友達の発表を聞いて，静かに出番を待っている姿を誉める。 ☆発表している姿で，良いところを具体的に誉めることで，自信につなげるとともに，他児への刺激になるようにする。

7 本時の指導

		本 時		平成 24 年 11 月 26 日(月)
幼 児 の 姿	<ul style="list-style-type: none"> ・相手と声を合わせようと、意識しながら発表している姿が見られる。 ・「セリフ覚えたよ」と教師に報告する子の姿が見られる。 ・セリフ練習では、「聞こえない」などの否定的な言葉を使って相手を指摘する子がいる。 			
ね ら い	○感じたことや考えたことを伝えることができる楽しさを味わう。	内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・セリフを大きな声でゆっくり発表する。 ・発表や話を最後まで聞く。 ・相手の発表を聞いて、気付いたことを伝える。 	
活動 仮説	・紙芝居練習の場において、相手の良い所を見つけて伝えたり、相手からも自分の良い所を聞いたりして、伝え合う喜びを味わうことができるだろう。			
時間		○予想される幼児の活動	☆教師の援助	◎環境構成
10:00	導 入	○教師の話聞く	☆これまでの取り組みを振り返り、観客を意識した発表の仕方について話を進めていき、活動の目的を持って取り組むことができるようにする。 ☆相手の頑張りをを見つけやすいようにペアを作り、ペアの確認をする。	
10:10	展 開	○グループごとに発表を見たり聞いたりする。 ○お互いに気付いた点を伝え合う。 ・相手グループの良い所を探し、感じたことを伝える。 ・自分の良い所を相手から聞く。	☆相手の発表を聞く場面では、良い所や頑張っているところを探して、気付いたことを伝えるよう知らせる。 ☆お互いに良い所を誉め合う場面では、様子を見守り、直したほうがよい所を伝えている場面では、「お客さんに見られる前に直すことができるね」と肯定的な言葉で励まし、練習の意欲につなげる。 ☆否定的な言葉を投げかける幼児に対して、相手の気持ちを伝えつつ、傍に寄り添うことで心の安定を図る。教師も一緒に参加し、様子を見守るなどして援助する。	◎今日の流れを、絵や文字を使って掲示する。 
10:35	ま と め	○今日の活動を振り返る	☆手遊びをすることで、集中してまとめの活動に入ることができるようにする。 ☆誉められてどんな気持ちだったのかを発表できる場を設定し、思いを共有できるようにする。 ☆緊張している幼児へは、背中に手を添えるなどして、安心して自分の気持ちを話すことができるように援助する。	
10:45				
評価	・感じたことや考えを伝え合うことはできたか。			

8 公開検証保育の様子

<導入> (写真1, 図5)
 みんなで一緒に話を聞く機会をもつことで、聞くことの楽しさを感じるようになる。
 保育の流れを掲示し、分かりやすいように視覚に訴える。



写真1 集中して話を聞く

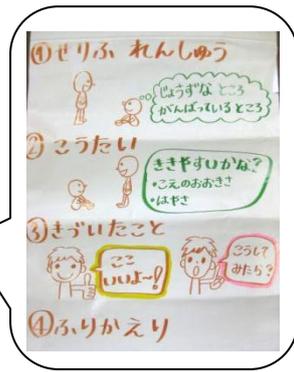


図5 保育の流れを掲示

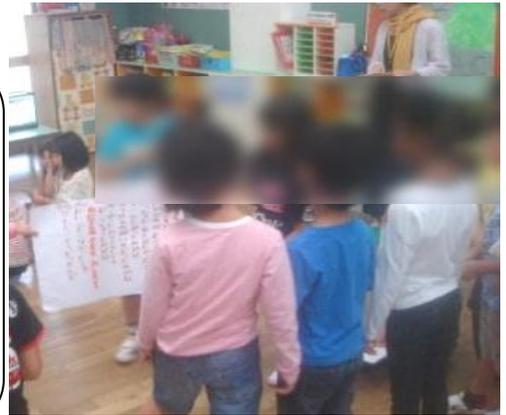


写真2 発表する

〈展開〉(写真2～5) 自分の思いや考えを伝えたり、相手の話を聞いたりする。



写真3 聞く

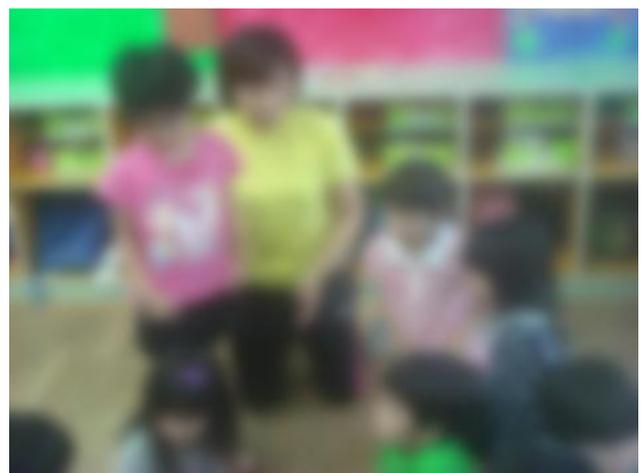


写真4 やってみよう!



写真5 発表の仕方を工夫

相手の発表を聞きながら、気付いたことや感じたことを伝える。

教師がパイプ役となり言葉を付け加えたり思いを尋ねたりしながら、互いの思いをつなげていく。

もうちょっと、ゆっくり言おう。

<まとめ> (写真6, 7) 振り返りの場で、発表者の思いを共有する。

落ち着いた場の設定。



写真6 手遊びで集中

耳を傾け、教師自身聞くことを楽しむ。



写真7 みんなの前では緊張

〇〇さんに、声が大
きいって誉められたのが嬉
しかったです。

Ⅷ 仮説の検証

本研究では、紙芝居作りにおいて、話したくなるような言葉遊びや絵本を活用し、幼児のつぶやきを拾って思いを共感したり、自分の思いを伝えるだけでなく相手の話も聞くことを繰り返し伝えていった。活動の様子、発言内容、保護者からの事前事後アンケートの結果などから、伝え合う喜びを味わうことができたかどうか検証する。

1 具体仮説(1)の検証

物語作りの場において、感動体験を通して、言葉遊びや絵本を活用して幼児に活動への期待を高め、話したい意欲につなげ、幼児の話に耳を傾けたり、発問して思いを引き出したりすることで、自分の思いを伝える喜びを味わうことができるだろう。

具体仮説(1)では、「自分の思いを伝える喜びを味わう」ことについて、動物について話している幼児の活動の様子や、保護者アンケートの分析などから検証する。

(1) 言葉遊びや絵本を活用する。

遠足に行く前に、出会う動物へのイメージを持つことができるように、動物に関する絵本の読み聞かせを行った。次に、イメージした動物を相手に伝える場として、言葉遊びの「動物集め」を設定した。

その結果、絵本に出てきた動物を思い出しながら伝える幼児、動物園で見かける「ライオン」「カバ」「ゾウ」など身近な動物を伝える幼児、「ラッコ」「サイ」「カメレオン」など普

ドラゴンとか!

キツツキは?

いるの?

いるよ、なあ!
(同意を求める)

ああ!
いいねえ!



写真8 話す意欲

段見慣れないような動物を伝える幼児など、自分のイメージする動物名を出し合っていた。その中で、相手の意見を聞いて思いを共感する場面も見られた(写真8)。また、全体の場では思いを伝えることが苦手な幼児も、グループで話し合うことで、自分の意見を伝える姿が見られた。

このことから物語作りの場において、幼児が話したくなるような絵本や言葉遊びを活用したことで、見たことや感じたこと、考えたことを伝えることができ、話したい意欲につながったと考えられる。

(2) 耳を傾け、発問して思いを引き出す。

感動体験の場の一つとして、遠足では、実際に見たり聞いたり触ったりすることで、感動や思いを言葉で表し、教師や友達に伝えていた。教師の援助として、伝える喜びが味わえるように、幼児の話に耳を傾けたり、共感したりして思いを受け止めた。また、発問して思いを引き出し、パイプ役となり話が伝わり合うよう援助した。(表6)。

その結果、教師に思いを受け止めてもらえたことから、周りにいる幼児にも自分の発見したことや気付いたことを伝える様子や、教師がパイプ役となる事で、教師だけでなく周りの幼児も同じイメージを持って会話を進めていく様子が見られた。

感動体験としての遠足を通して、言葉で表された感動や思いに耳を傾け、共感したり、発問を投げかけて思いを引き出したり、周りの幼児と一緒に聞くことを楽しんだりしたことは、幼児が自分の思いを伝える喜びを味わうことに概ね有効であったと考える。

(3) 感動を共有する。

遠足後の保育では、遠足での楽しかった思いを共有できる場として、全体での振り返りの時間を設けた(写真9)。教師の援助として、見たことや感じたこと、観察して思ったことなどを引き出すことができるように発問をし(表7)、幼児の思いに耳を傾けたり共感したり、全体に投げかけた。

その結果、教師の問いかけに対して、それぞれが遠足の出来事を思い出しながら自分の思いを伝える姿が見られた。

保護者からのアンケートを11月と12月の2回行った(図6)。「自分の思ったことを言葉で伝えることはできますか?」という質問に対して、「そう思う・どちらかとい

表6 コウモリの歩き方

S男「僕、コウモリが歩いているの見たことあるよ。」
 教師「え!コウモリって歩くの?」
 ☆共感して思いを受け止める。また、周りとのパイプ役となる。
 R男「え?コウモリは歩かないよ。」
 教師「どうやって歩くの?」
 ☆発問することで思いを引き出していく。
 S男「こんなだよ。」(手足を上下に動かして真似ている。)
 R男「こんな?」(笑いながら真似ている。)
 S男「こんな、こんな。」
 教師「これから歩いているコウモリ見てこようよ。」
 ☆イメージから興味関心がわき、観察視点へとつなげる。



写真9 全体での振り返り

表7 振り返りの様子

教師「こどもの国に動物がいっぱいたね。どんな動物がいた?」
 ☆それぞれ自分の思ったことを言いやすいような発問をする。
 幼児「ライオン。」「キリン。」「ワニ。」「モルモット。」(それぞれ印象に残っている動物を上げている。)
 幼児「ライオン。」「でっかい声で鳴いてたよ。」
 幼児「僕達、最初から見てたよ。」
 教師「そうだったね。じゃあ、ライオンの声聞いた人?」
 ☆共感し、全体で共有できるように質問する。
 幼児「はい!」(ほとんどの子が手を挙げる。)

えばそう思う」の回答を含めて85%から88%増えるという結果になった。その中で、「そう思う」の回答から数値が1%下がり、アンケート全体の分析からはあまり変容が見られなかった。

このことから、全体やグループ活動だけでなく日々の保育の中で個とじっくり関わり、個々の思いを共感するなどの幼児理解の充実が必要である。

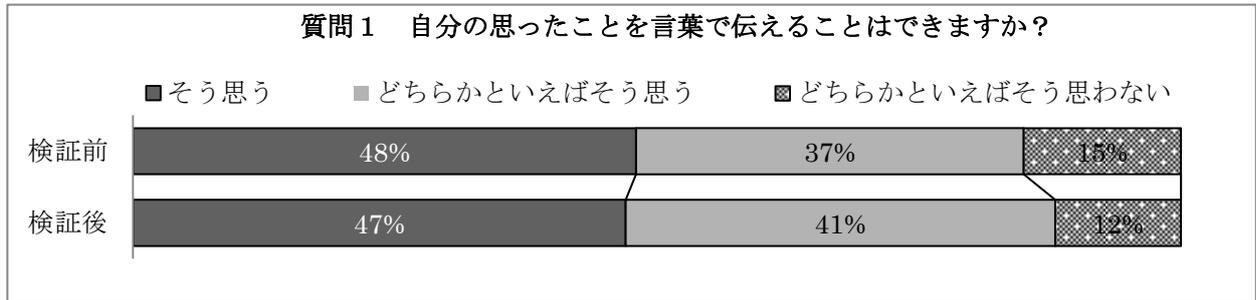


図6 保護者アンケート

2 具体仮説(2)の検証

製作する場において、相手の思いに気付き共感する楽しさが存分に味わえる援助を工夫することで、話す楽しさや聞く楽しさを味わうことができ、伝え合う喜びを味わうことができるだろう。

具体仮説(2)では、「伝え合う喜びを味わう」ことについて、活動の様子や保護者からのアンケートなどから検証する。

(1) 相手のイメージを具体的に伝える。

紙芝居の背景色を、グループで一色決めることを伝えた。また、「相手の話も聞いてから決めてね。」と言葉をかけた。ほとんどのグループは、「赤はどんな?」「いいねえ。」などと出てきた意見に全員が納得して色塗りを始めた。しかしもう一方では、意見が分かれどちらも自分の意見を主張していた(表8)。そこで、相手の思いに気付きやすいように色のイメージについて具体的に聞いた。仲立ちしてお互いの気持ちを伝えたり、言葉を付け加えてイメージが持てるようにした。

その結果「なぜその色がいいのか」という相手の思いに気付くことができ、S男は自分の思いが伝わった喜びを、A子は相手の思いが分かり共感する楽しさを味わうことができたと考えられる。

(2) 相手の考えを伝え、共有する。

セリフの構成では、「相談しよう」をキーワードに、自分の考えたことや相手の話を聞くことを繰り返し知らせていった。すると、「次〇〇だよ」と一人一人順番にセリフ(図7)を

表8 相手の思いに気付く

S男「赤がいい。」 A子「ピンクがいい。」
 教師「何で、その色がいいの?」
 ☆自分の気持ちを具体的に伝えることができるように思いを尋ねる。
 S男「赤はかっこいいさ〜。」
 教師「そうだね。あ、今日のTシャツも赤だね。」
 ☆心を傾けて幼児の話聞く。
 A子「ピンクはかわいいから。」
 教師「そうだね。それに、動物たちが仲良くしているみたいだね。」
 ☆言葉を付け加え、イメージが持てるようにする。
 教師「どっちもいい色だね。どうする?」
 ☆再度思いを尋ね、気持ちを引き出す。
 A子「(動物が)喧嘩するところだから赤でもいいよ。」
 S男「ありがとう。」

きいろ	セリフ「どうぶつがいう ことば」
どうぶつの なまえ	
うさぎ	ねてあそぼ
らいおん	なにしてあそぶかかえれんぼしよ
くま	ぼくもいれて
きりん	ぼくもいしょにいれて
ぞう	おれもいれて

図7 考えを表す

決めていく様子が見られた（写真10）。

他グループのあらすじや「〇〇グループは、同じセリフにしたいときは、『いいよ』とか『ぼくも』とか入れていたよ。」とアイデアを伝えることで、話を聞いて理解し、「いいねえ、俺たちも入れよう。」「じゃあ、『ごめんね』のあと『ぼくもごめんね』は？」などと自分たちのグループの構成に取り入れて、自分の考えを伝えたり、相手の意見を受け入れたりする様子や、「いいねえ。」と共感する言葉が聞かれた。

このことから、相手の思いに気付く共感する喜びを味わうことができたと判断する。



写真10 相手の話も聞きながら

保護者からの事前事後アンケートを比較すると、質問2の話すことに関するアンケート（図8）では、検証前は回答者全員が「そう思う・どちらかといえばそう思う」と、話すことに対して肯定的な意見であったのに対し、検証後には9%の幼児が、「どちらかといえばそう思わない」と回答しており、「話すことがどちらかといえば嫌い」になったと読み取ることができる。

一人一人のアンケート結果から、9%の中に、自分の思いばかりを伝えるC児と同グループの幼児が含まれていたことが分かった。同グループの幼児は、質問1での「思いを伝えることはできる」の問いに対しては「そう思う、どちらかといえばそう思う」と回答している。自分の思いを伝えることはできるが、話をしたときの相手の反応からくる不安の表れだと捉える。これは、C児や周囲の幼児に寄り添った援助の不足が原因だと考える。また、幼児の「話したい」と思えるような保育内容から、教師主体の「上手に話す」ことの指導からも、このような結果につながったと思われる。

そこで、今後はC児やC児にかかわる幼児への援助の見直しを行い、それぞれの幼児の思いを十分に受け止め、話す楽しさが味わえるようにしていく必要がある。また、どのように話をしたらよいのかを幼児自身に考えさせ、気付きや問題解決へと導くことができるような発問の工夫を行う必要がある。

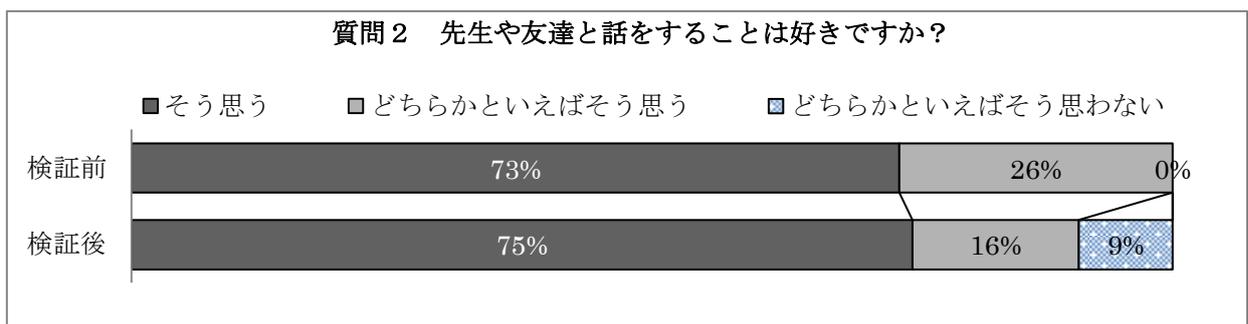


図8 話すことに関する保護者アンケート

(3) 聞く楽しさを味わう活動

聞く楽しさを味わうためには、幼児自身が「相手の話も聞きたい」と思えるような気持ちになることが必要である。そこで、言葉遊びの一つとして「スリーヒントクイズ」を設定した。スリーヒントクイズでは、3つのヒントを最後まで聞かないと答えが分からないようにし、幼児自身が「最後まで話を聞くことは楽しい」と思えるようにした。また、動物の特徴だけでなく生態も問題文（表9）に織り交ぜ、少し難易度を高くすることで、グループの友達同士で相談してもよいことと伝えた。

しかし、ゲームが始まると、問題文を最後まで聞かずに自分の考えをすぐ言ってしまふ幼児や、グループの友達の話を見聞かずに一人で答えのカードを取ってしまう幼児がいた。そこで、教師の援助として最後まで問題文を見聞かすことや、答えが分かつたら同じグループの友達にも伝えることを知らせていくことで、相手に自分の考えを伝えたり聞いたりする姿が見られた（写真 11）。



写真 11 話を聞く

振り返りの場での活動に対する発表では、「最後に間違えて悔しかった」「教えてくれて嬉しかった」とあり、答えを当てるように必要性を持って話を聞いていたことや、問題の内容が分からなくても、教えてもらい、相手の話を聞くことで、相手の考えを共有する喜びを味わうことができたと考えられる。

質問 3 の聞くことに関するアンケート（図 9）では、検証前と比較して検証後は「そう思う」の回答が 42% から 56% に、「どちらかといえばそう思う」の回答が 42% から 41% にと、「そう思う・どちらかといえばそう思う」を合わせて、12% の変容が見られた。

話を聞きたいと思う理由（図 10）として「面白そうなお話するとき・みんなが笑っているとき」など興味関心がある話のときの他に、「いろんな事が聞けるから好き」「自分が知らないことを相手に話そうとしているんだと思ったとき」「友達の話を見聞いて『すごい』と思う」など必要性を感じて聞こうとしていることがうかがえる。

検証後に「相談すること（自分の意見を言う・相手の考えを見聞く）」について、大切だと思う理由を挙げてもらった。コメントは、保護者が実際に幼児に聞いて得た回答である。コメント内容については「喧嘩をしないように話し合いをする。」「お友達のお話を見聞かないといけぬ。」「自分が考えていたことよりも、もっといい考えがでてくるから。」との回答があり、相手の思いに気付き、相手の話を聞こうとする思いや共感する思いが味わえたことがわかる。

これらのことから、製作の場において、相手の思いに気付き共感する楽しさが味わえるような援助を工夫したことから話を聞く楽しさを味わうことはできたと考えられる。

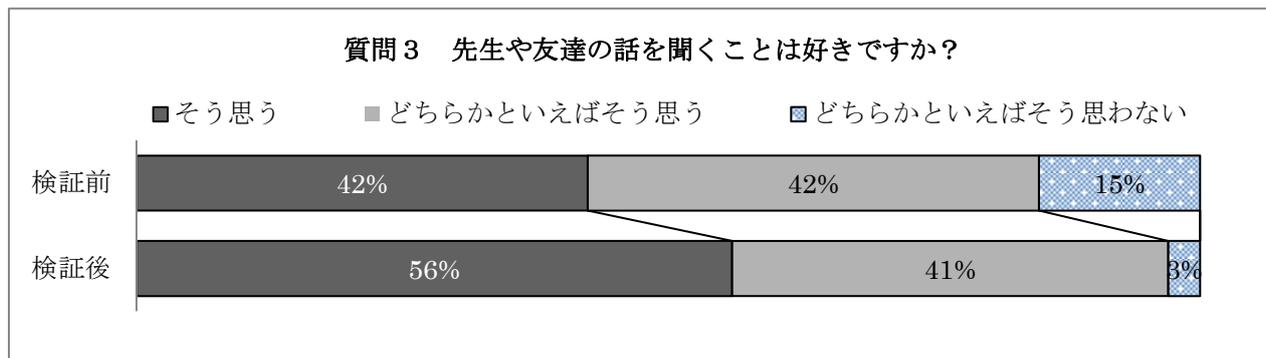


図 9 聞くことに関する保護者アンケート

「話を聞きたい」と思う時は？（保護者アンケートより）

「わからぬい事があつた時。みんなが笑つてる時等

「みんなの名前を言つたり、楽しかつたことほどを發表するのが好き」と本人が言つてます。
先生や友達のお話を聞くことどちらも好きと話しています。

友だちのしほふもきいて 「スゴイ」とおもつ

先生は、色々な事をおしえてくれるし、楽しいので聞くのが好きと
言つていました。先生の話を聞いていないと、大事な事がわからぬかたり
するからと、言つていました。

図10 話を聞きたいと思うとき

Ⅸ 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 物語作りの場において、絵本を活用し動物へのイメージを持たせたり、言葉遊びを取り入れたりすることによって、絵本や経験からイメージする動物を全員が話すことができた。また、全体の場では思いを伝えることが苦手な幼児もグループで話し合うことで自分の意見を伝えることができたことから、話したい意欲につながったと考える。
- (2) 感動体験を通して、幼児の話に耳を傾け、共感して思いを受け止め、発問して思いを引き出し、他児とのパイプ役になるなど行ったことから、教師や友達に自分の思いを伝え、友達と共通の話題で思いを伝え合うことにつながり、自分の思いを伝える喜びを味わうことに概ね有効であった。
- (3) 製作する場において、相手の思いに気付くことができるように、双方の幼児の思いを教師がくみ取り、気持ちを具体的に伝えたり、必要に応じて言葉を付け加えたりしたことで、自分の思いが伝わる喜びを味わうことができたと考える。
- (4) 自分の考えを伝え、相手の話もしっかり聞くことを確認し、よいアイデアを共有できるようにしていくことで、自分の考えを伝えたり、相手の意見を受け入れたりする様子が見られた。幼児のつぶやきや表情の見とりからも、相手の思いが分かり共感する楽しさを味わうことができた。

2 課題

- (1) 全体やグループ活動から自分の思いを伝える喜びを味わうことができるために、教師対個々とのかかわりを充実させ、思いに寄り添い、十分に受け止める必要がある。今後、一人一人の思いに共感するなどの幼児理解に努め、気になる幼児への援助や、周りの幼児への援助の見直しを考えていきたい。
- (2) 話す喜びを味わうことができるために、心動かされる体験について、遊びの中で、友達と遊び込むことを通して発見や気付き、葛藤などを大切にしたい幼児主体の言語活動が必要である。また、どのように話をしたらよいのかを幼児自身に考えさせ、気付きや問題解決へと導くことができるような発問の工夫を行う必要がある。
- (3) 教師や友達とのかかわりや遊びに関連付けた年間指導計画の作成と実施をすることで、より発達に沿った計画的な教師の援助や環境構成などを行うことができるであろうと考える。

〈主な参考文献・引用文献〉

- ・神長美津子・岩立京子 2009 『新幼稚園教育要領の展開』 明治図書
- ・無藤隆・柴崎正行 2009 『新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて』 ミネルヴァ書房
- ・小宮山繁 2008 『ことば遊び アラカルト』 小学館
- ・藤田復生 1980 『保育内容事典』 日本らいぶらり
- ・森上史朗 1982 『音楽リズム・言語・劇遊び』 内田洋行